
君さえいれば

塔城 虚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君さえいれば

【ZPDF】

N1384D

【作者名】

塔城 虚

【あらすじ】

そばにいて当たり前だと思っていた。守ってみせると誓った。それなのに・・・かけがえのないもののため、自身の幸せをなげうつ決意した少年のお話です。

プロローグ（前書き）

はじめまして、塔城 虚と申します。
この作品が処女作となりますので、お見苦しい点もあるかと思いますが、楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ

どうしてこんなことに・・・。

どうしてアイツがこんな目に遭わなきやならない？

アイツが何かしたか？

もし神様つてのが居るんだとしたら、なんでアンタは、アイツを奪おうとするんだ？

アンタは、アイツがどれだけ楽しそうに笑うか知ってるか？

アイツが笑ってるだけで、何だって出来そうな気がするんだ。

そりゃあ、アンタから見ればアイツもちっぽけな人間の1人なんだ
わいわい。

でもな、俺にとつては他の何よりも大切な奴なんだよ。

なんでアイツなんだよ。

世の中には救いようのない奴らがたくさんいるだろ？

なんでそういう奴らじゃなくてアイツなんだよ。

アイツは・・・、俺の大切な・・・。

突然の悲劇

それは突然だつた。

「ただいま。」

高校2年で帰宅部の俺、あいかわたける相川猛は放課後、いつも通りに帰宅した。といつても、誰かがいるわけではない。兄弟はないし、両親もこの時間はまだ仕事中のはずだ。

自室で私服に着替え、復習と宿題をさつと済ませる。

別に俺が勉強熱心なわけではない。テスト前に一気に詰め込むような根性がないだけだ。毎日少しずつやれば1・2時間で済むが、時間が空けば余計時間がかかるから、その日のうちにやつておいたほうが後で楽ができる。ただそれだけ。

やることを済ませた俺は、まだ読んでいなかつた小説に手を伸ばした。

その時、デスクの上の携帯が鳴った。

ディスプレイには

『みさわかえで
三沢楓』

の文字。

楓さんから？ いつたい何の用だ？

珍しい相手からの着信に首をかしげながら電話に出た。

「もしもし。」

「猛君！…？ いい、落ち着いて、これから言ひつことをよく聞いて。」

「どうしたんです？ そんなに慌てて。」

「舞^{まい}が事故に遭つたわ。」

「…は？」

「詳しいことまだ分からぬけど、ひき逃げらしいわ。」

「…ひき逃げ？ 舞が？」

「県病院に搬送されたらしいんだけど…。猛君？ 聞いてるの、猛君！？」

詳しい状況なんてどうでもいい。場所さえわかれば十分だ。

俺は、楓さんの呼びかけを無視して、家を飛び出した。

「…」を「…」走ったのかなんて覚えてない。

この間にか降り出した雨はすでに土砂降りになつていて、水たま

りに足を取られながら、ただひたすら病院を田舎した。

自動ドアが開くのもどかしく病院に飛び込むと、ナースステーションで居場所を聞き出し、教えられた病室へ急ぐ。

そこに彼女はいた。

白一色の無機質な室内に置かれたベッドの上。

肩口で切りそろえられた艶のある黒髪。整った目鼻立ちに柔らかそうな唇。美しいといつより、可愛らしさと言つたほうがしつくりくる、そんな少女。

みさわまい
三沢舞

いつの間にか一緒にいて、いつからかそれが当たり前になっていた、おれの大切な幼馴染。

原点

舞と初めて会った時のことなんて全く覚えてない。

物心ついた時には俺と舞は一緒にいた。

俺の両親と舞の両親は、彼らが中学生のころからの付き合いらしい。

俺達が生まれてからも家族ぐるみの付き合いがあつて、俺達は家族同然に育てられたそうだ。

俺にとって舞はそばにいて当たり前の存在だった。

小さいころの舞は人見知りが激しく、友達も少なかつた。いつも俺の後ろをついて回るようなやつで、俺は手のかかる妹のように感じていたんだと思う。

小学校に上がつてもそれは変わらず、クラス内でも孤立しがちだった。

幸い俺はそれなりに社交性があつたようで、友達もたくさんできた。だから、俺はいつも舞の手を引いて舞が孤立しないようにした。それが舞をさらに孤立させてしまうとは思わなかつたから。

ある日、学校が終り、帰ろうとした俺は舞の姿がないことに気づいた。鞄がまだあつたから、俺は探すことにした。なかなか見つからず、途方に暮れかけた時、漸く舞を見つけた。

舞に友達ができたと喜びかけた時、舞の様子がおかしいことに気が付いた。近付いてみると、舞がうつむいて肩を震わせて「ふー」とかかつた。

舞はいじめられていた。

半ば強引に連れ出して、そのまま田代へ帰った。

帰り道で、それまで黙り込んでいた舞が漸く口を開いた。

「たけるくん、ありがとう。」

「やめておこうよ、かぞくをまもるのはあたりまえだろ。」

「うそ。」

「なにがあつたんだ？」

「うん、えっとね・・・。」

そうして舞は話し始めた。

いつも男子とばかり語る「こと」で悪口を言っていたこと。今日が初めてではないこと。

俺は舞をいじめていた連中以上に、自分自身に腹が立つた。今まで気づいてやれなかつたことが情けなかつた。舞を守つてやれなかつ

たことが悔しかった。

だから、俺は誓った。もう一度と舞を傷つけさせないと。俺が周りに恨まれても、舞を傷つけるものは叩き潰す。

「まい！まいはおれがまもる。ぜつたいだ！」

「うん！」

あの時の舞の嬉しそうな笑顔を俺は忘れない。

成長するにつれて舞にも沢山友達ができた。

中学に上がるころには今の活発で明るい舞になつていて、いじめられることもなくなつた。

舞は俺が守つてみせる。

舞には笑つていてほしいから。

これが俺の原点でありアイデンティティ。

それは今も変わることはない。いや、舞が俺のそばにいる限り、これからも変わることはないだろう。

それなのに。

俺は、また、舞を守れなかつた・・・！

信じてる

「『めん…。』『めんな、舞。守つてやるって言つたのに、結局何もできなかつた…。』

俺が病院に着いてから数時間が経つたが、舞の意識はいまだに戻らない。

医者が言つにはかなり危険な状態らしい。

舞をはねた車はかなりスピードを出していたらしく、即死しなかつたのが奇跡的なのだといつ。心臓は動いてはいるが、一番の問題は脳の損傷なのだそうだ。一命は取り留めたものの、意識が戻るかどうかもあやしく、意識が戻つても何らかの後遺症が出る可能性が高いと言つていた。

：なんだよそれ。舞が一度と田覚めない？田覚めても、今まで通りの生活はできない？

ふざけるなー！

俺はそんなの認めない。舞は必ず田覚めるにきまつてゐる。

見てみろよ。気持ち良さそうに眠つてただけじゃないか。今すぐにでも『うー、おはよー。』とか言いながら、いつも通り起き上がるにきまつてゐる。

大体、朝も昼もあんなに元気だったじやないか。寝起きは悪い癖に、家を出る時には見てるこつちが疲れるくらい元気で、休み時間だつ

てみんなと騒いでたんだ。あの舞が、こんなことで死ぬわけがない。ひょっとして、ほんとはもう起きてて、俺を驚かせようとしてるだけかもしれない。

「お～い、舞～。いい加減にしないとほんとに怒るや～。」

肩を軽くゆすってみても、目を開ける気配はない。

まつたく、呑氣なもんだよな。いつまはこんなに心配してるのでに、気持ち良わせつい寝やがって。

早く起きや～よ。起きて『なんで助けなかつたんだー！』って怒れよ。

なあ……、頼むよ。

ガラッ。

扉の開く音で現実に引き戻された。どうやら、舞に文句を言つながらこつのか間にか眠つていたらしい。

振り返ると親父がいた。

もひんな時間なのか。

「詳しこじとは楓に聞いた。」

「やうやく……。」

「猛。今日はそろそろ帰らへ。」

「…いやだ。」

「お前は明日も学校だらう。」

「…学校なんて行つてる余裕ないよ。」

「舞ちゃんが心配なのはわかる。だがな、それでお前が学校休んで、舞ちゃんが喜ぶと思うのか？」

「…いんだ。」

「ん？」

「怖いんだよ。俺が学校行つてる間に、舞になにかあるんじゃない
かつて。舞が…いなくなるんじやないかつて。」

「猛ー！そんな」と叫びもんじやないー！」

「わかつてる！俺だつて、舞は絶対よくななるつて信じてるー。」

「猛。」

「それに、舞…怖かったと思う。いきなり後ろから撥ねられて、何
があつたのかも分かつてないと思う。そんなの、怖かったにきまつ
てる。だから、舞の意識が戻った時そばにいて、安心をせてやりた
いんだ。」

そう、警察の捜査の結果、舞を撥ねた車は、舞の後ろから猛スピード

ドで突つ込んだことが分かつた。つまり、舞は自分の身に何が起つたのか理解できなまま意識を失つたんじゃないかつてことだ。

「…」

「それに俺、舞と約束したんだ。舞は俺が守るって。なのに、結局何もできなかつた。だから、せめてずっとそばについててやりたいんだ。」

視界が歪む。舞が怖い思いをしてるのに何もしてやれなかつた自分に、今こいつして、手を握つてやってやることしかできない自分に嫌気がさす。

きつと今、俺はひどい顔をしているだろう。けどこんなもの、舞の感じた恐怖に比べれば何でもない。だから俺は笑つていよ。舞が田覚めた時に安心できるよ。

「はあ…。わかつた、好きにこいつ。だが、そういうたからには最後までやりぬけ。いいな。」

「…ああ、わかつてゐる。ありがとう、父さん。」

「お前の頑固さは^{みち}美智譲りだからな。好きにさせたほうがいいことくらいわかつてる。」

「母さんほじじゃないと思つたんだなあ。」

「ただし、無理はするなよ。それでお前が体調崩したら意味がない。それに、そんなことになれば、俺が舞ちゃんに叱られるからな。」

「

「…たしかに。」

「じゃあ、俺は帰るからな。何かあったらいすゞに連絡しろ。夜中でもかまわん。」

「ああ。おやすみ、父さん。」

ガラツ、バン。

舞、安心しろ。お前が起きるまで、俺がずっとここでやるから。

だから、早く起きろよ、舞…。

れぬいなり（繪畫師）

じぱりく更新でれませんでしたが、れぬいから再開します。

舞の事故から今日で1週間になる。

その間、舞の容体はほとんど変化がなかつた。

目覚めることもなければ、死に至ることもない、完全な停滞。

俺はこの1週間、シャワーを浴びに家に帰る以外はその時間のほぼすべてをこの病室で過ごしていた。

そして昼過ぎのニュースで、舞を撥ねた犯人が逮捕されたことを知つた。

正直どうでもよかつた。舞をこんな目に遭わせたのは確かに許せないが、犯人が捕まつたところで、舞が目覚めるわけではないのだから。犯人の名前だと人柄だと、俺には何一つ関係ない。

だから、夕方になつて犯人が病院に現れた時も、別にこれといった興味はなかつた。

廊下から聞こえる犯人の男の楓さんたちに対する謝罪の言葉を聞きながら、彼の言葉が本心であろうことはよくわかつた。だからこそ俺は彼に言いたいことがあつた。

扉を開けて廊下へ出る。俺の様子を見て殴られると思つたのか、身を固くした男を見据える。

「あなたを殴つて舞が目覚めるのなら、俺はいくらでも殴りましょ

う。ですが、そんなことをしても舞が目覚めるわけじゃない。それどころか、舞がそのことを知つたらアイツが傷つく。舞は、ほんとうに優しいから。だから、俺はあなたを殴りはしません。そして、俺に謝る必要もありません。ただ、祈つてください。舞が目覚めるように、今まで通りの日常過ごせるように、祈つてください。そして、今あなたのにある謝罪の言葉を、アイツに直接伝えてください。俺があなたに望むのは、それだけです。」

話しているうちに、涙があふれてきた。舞の笑顔が、泣き顔が、怒った顔が、浮かんでは消えていく。今迄にいろんな表情を見てきた。いろんな声を聞いてきた。その表情をもつと見てみたい。あの声をもつと聞いていたい。俺の願いは、ただそれだけだから。

あの後、情けない顔を誰にも見られたくない俺は、すぐに舞の病室に逃げ込んだ。

俺が病室に入つてしまはらくして、犯人の男は警察に連れられて行つた。

あれから結構経つているはずだが、それでも誰も入つてこないのは、氣を遣つてくれていてるのだろうか？正直ありがたい。

「あ、舞。お前ほんとにいつになつたら起きるんだよ。お前が寝てる間にいろいろあつたんだぞ。ってほどでもないか。でもさあ、お前がいないだけで世界がまったく別のものに見えるんだよ。お前がない世界は静かすぎるんだよな。だからさ、早く戻つてこいよ。みんな待つてるんだからな。」

神様でも仏様でも、悪魔だつてなんでもいい。

舞を助けてくれよ。

何だつてするから。俺が死んだつていいから。

舞にだけは、生きていてほしいんだよ。笑っていてほしいんだよ。

頼むよ…。

カラカラカラ。

ん？誰か来たのか？

いつの間にか寝ちゃつてたみたいだ。

「あれ？誰もいない。気のせいかな？」

「気のせいなんかじゃねーザー。」

「つー？」

「よお、こんばんわ。」

振り向いたその先。

開いた窓から差し込む月明かりに照らされて佇む一人の男。

「お～い。聞いてんのか～？」

奴の声にまつとした。とつさに奴と舞の間に割り込む。

「誰だー？」

奴を睨みつける。奴はそれを気にする様子もなく、皮肉気に笑つて見せた。

「そう怖い顔すんなって。別に取つて食あうつてわけじゃねえんだからよ～。ああ、俺はヴィンカ、悪魔だ。よろしくなーお前は？」

「あ、相川、猛。…つて、悪魔ー？」

「そつ、悪魔。」

「そんなもんいるわけないだろー？」

「おいおい、お前が呼んだんじゃねえか。『神様でも仏様でも、悪魔だつていい』って。せつかく来てやつたのにそりゃねえだろ。」

「つー? 本当…なのか?」

「ああ。俺と契約すりゃ、そいつを助けることだってできる。当然、代価は貰うけどな。」

「代価?」

「契約者の魂、つまり命つてのが一般的だな。契約者の願いを叶える代わりに、そいつの一一番大切なものを貰う。これが、契約の唯一の条件だ。簡単だろ？」

「ああ、これ以上ないってへらにな。」

「それで、どうする？契約するか？俺の見立てだと、その女、起きねえよ…永遠に。その女が猛、お前にとつて一番大切なものを投げ出すだけの価値があるつてんなら、俺と契約すりやあいい。心配すんな、俺は自分に誇りを持つてる。その誇りに誓つて、あつちり叶えてやるよ。お前の願いを。」

「…わかった、契約しよう。俺の願いは、『舞が目覚め、笑つてられる』事。そのためなら、俺の命でもなんでもくれてやる。」

皮肉な笑みを消したヴィンカの目を見据えて、言った。

「いいぜ、契約完了だ。」

「と」ひるで、俺の代価は何なんだ？やつぱり…命…なのか？

「いや、違うな。もっとふさわしいもんがある。」

「…？なんだよ？」

「『記憶』だ。」

「記憶…？」

「お前、その女のためなら死んだつていいと思つてんだろう？なら、

そんな命なういらね。」

ヴィンカはソード言葉を切り、愉快そうに顔を歪める。

「俺がいただく代価は、その女の持つお前の記憶だ。その女に連れ去られたら、お前はどうなるんだうな？」

「なつー？」

「アイツが、舞が俺を忘れる？今までずっと一緒にたあいつの中から、俺がいなくなる？」

「でも、それで舞が助かるんなら……。

「……それで、舞が助かるんだな？」

「ああ、約束する。まあ、それがいやだつてんなら、今から契約を破棄することだってできるぜ？そのときはあの女が死ぬだけだ。」

舞が死ぬか、舞が俺を忘れるか、か…。そんなの、悩むまでもないだろうが。

「こや、その必要はない。頼む。」

「やうか。なら、やうせよひらめかへ

ヴィンカがそつぱつて舞の額に右手をかざすと、ヴィンカの右手が淡く光り、すぐに消えた。

「これでいいはずだ。ああ、一つ言つ忘れた。お前、あんまりこ

つにあわねえ方がいいだ。」「

「…へビツヒツヒツだ?」

「俺さあ、あんまりーゆづの慣れてねえんだわ。だから、下手にお前に会うと何が起るかわからねえ。どうせこいつもお前のこと覚えてねえんだしよ、お前もこいつのこと忘れちまえよ。そりすりや、お前も苦しそうに済むだらうしな。」「

俺が苦しいだけなら俺が耐えればいい。でも、俺が近くにいると、舞がどうなるか分からぬ。

だったら、俺は舞から離れたほうがいいんじゃないかな?

「まあ、まだ目が覚めるまでも少し時間がある。その間に考えとけよ。じやあな。」「

そつ置つて、ヴィンカは窓から飛び出して行った。

…舞から離れる、か。そのほうがいいんだよな。

「舞、ごめんな。俺にできるのはここまでみたいだ。約束…したのにな。やつてやるつて言つたのにな…。」「めん…舞、今までアリがとう。さよなら…。」「

病室を出ると一歩までが限界だった。涙がこぼれない。

こんな感じで泣いてたら邪魔だよな。

…帰るわ。

「猛君？」

あ～あ、楓さんに見つかっちゃたか…。まあいや、楓さんには言つておくか。

「楓さん。そろそろ、舞が起きると困ります。つこつとあげてください。」

「猛君はまだいるの？」

「俺はいいんです。もう、舞の中に俺はこませんから…。それから、舞の前で俺の名前は出さないでください。こひださ。」

「ひょ、ひょっと一回囁いてるのー？」

「お願いしますー。」

もう耐えられなかった。

楓さんの制止の声を振り切って、俺は病院を飛び出した。

舞、今までありがとうございました。そして、わよひなり…。

あまびなひ（後書き）

今回の投稿分を含めてあと4話ほどで完結になると想っています。
評価、感想等お待ちしております。

君は何処に？

あの日以来病院には行っていない。

両親の話では、やはり舞は俺のことを何一つ覚えていないらしい。
出でていなにようだ。

ヴィンカの言つ通り、俺に関する記憶だけがきれこさつぱり消え失せたのだろう。

もひるん俺はそれを嘆くつもりは毛頭ない。

父さん

『ひらぐないのか？』

と聞こてきたが、つらぐないわけがない。

だが、舞の意識が戻ったのならそれでそれでいい。

そう呟えると何か言いたそりでしていたが、結局何も言わずにいてくれた。

舞の事故から一週間、つまり、舞の病室に行かなくなつて一週間が経つた。

俺の生活は、舞がないこと以外は概ね以前のものに戻った。

『概ね』ということは当然例外もあるわけで。

その例外たるモノが今、目の前に在る。いや、居ると書いたほうがいいのだろうか？

「で？お前はいつまで俺に憑いて回るつもりだ？」

高校から帰る途中、視線を前に向けたままソレに話しかける。

「気にはなって。まあ、なんつーか…そう、あれだ、アフターケアってやつだ。」

「アフターケア？」

「そ、アフターケア。この間も言つたろ？あーゆーの慣れてないって。それで何かあつたら俺がヤバいわけよ。またあの死神ヤローに捕まつたらと思うと…、ああ…考えただけでゾッとするぜ…。」

ワインカはそう言つて、自分の肩を抱いて震えはじめた。

まあ、確かに、ワインカが俺に迷惑をかけているわけではないのだが、悪魔に憑き纏われるのがあまりいい気がしない。

「そーいえばよー、あの舞つて女、きょう退院だつてな。」

なんで急にそんなことを言い出すんだ？アフターケアつてことはもうしばらく様子を見たほうがいいんじゃないだろうか。

「やうひじこな。それがどうかしたのか?」

「氣になんねーのかよ?」

「俺が氣にしたって仕方ないだろ。俺はあいつに関わらない方が良いんだろ?」

「まあ、やうなんだばどよ…。」

なんだつて言つんだ?」こつてはやけに歯切れが悪いな。
まあ、ここつてはやけに歯切れが悪いな。
とじやないか。

そんなことを考えてこるといつてはやけに歯切れが悪いな。
そんなりとを聞いてこると、こつてはやけに歯切れが悪いな。
た。

そつてはやけに歯切れが悪いな。
インカはベランダから廊下に入らせないとな。

「おこ、ヴィン!猛、あれ、お前のお母さんが家に居るつて言つてたつけ。ヴィ
ほんじだ。どうしたんだろ?」

ヴィンカに言われて見てみると、母さんがひどく慌てた様子で家から飛び出したところだった。

「母さん、なにかあつたの?」

駆け寄つて声をかけると、母さんに肩を掴まれた。ちゅうと、いや、

かなり痛い。

「猛!、舞ちゃんが、舞ちゃんが!」

「か、母さん…ちょ、落ち着いて…」

両手で母さんの肩を掴んで引きはがす。相手を落ち着かせるには、まず自分が落ち着いて話しかけるのが手っ取り早い。

「母さん、落ち着いて。」

数度深呼吸をして、落ち着きを取り戻したところで声をかける。

「落ち着いた?」

「ええ、大丈夫。落ち着いたわ。」

その言葉を確認して手を放す。

「それで、何があったの?舞がどうとかつて…。」

「猛、落ち着いて聞きなさい。…舞ちゃんが、病室からいなくなつたわ。」

「舞がいなくなつた?どういふことだ?今日は一日、楓さんが付いてるはずじゃ…?」

「楓ちゃんが退院の手続きのために十分くらい病室を離れたらしいの。それで、楓ちゃんが病室に戻った時にはもう…。」

「さうか…わかった、俺も探す。舞の恰好は？」

すぐにも走りだしたい衝動をこらえて、今までに分かつてこむことを聞き出す。

かあさんによると、退院の準備はほぼ終わっていて、手続きが終われば、あとはもう出るだけだったらしい。当然、私服に着替えた後だ。私服となると、人ごみの中から探し出すのは困難になる。

警察への連絡は済んでいるらしいから、俺達は心当たりのある場所を探すべきだろ？

母さんにそう云ふると、踵を返して駆けだしていった。

俺も、母さんと逆方向に走り出しながら、携帯を取り出し友人に片端から連絡する。

ある程度の人数を確保し携帯をポケットに挿じ込んだところで、ヴィンカが声をかけてきた。

「お前、結構冷静だなー。てっきり何も考えずに走り回るんだと思つてたぜ。」

「ああ、俺も自分で信じられないくらい落ち着いてる。人間、驚きすぎると逆に冷静になるってのは本当かもな。」

そんな軽口を叩きながらも決して足を止めることなく、思いついた場所を回つていく。

探し始めてからどのくらい時間が経つただろうか。

思いつく限りの場所はすべて回つたはずだ。

しかし、いくら探しても舞の姿はない。

「クソッ！…ど、こ、い、る、ん、だ、！？」

まさか、行き違いになつたのか？いや、連絡を入れた友人の数を考えれば、仮にそうだつたとしてもそろそろ見つかるはずだ。じゃあ、まだ探してないところに居るのか？思い出せ、あとアイツがいきそな所はどこだ？

「おーい、猛一。」

「うるせー！少し黙つてろ！」

「ちよつと落ち着けってー。さっきお前が言ったことじやねーか。」

そうだ、焦ったところでどうなるわけでもない。

「あ、ああ、そう…だな。」

「それでよー、猛。今までお前が行つたところって、他の奴も知つてるところなのか？」

「ああ、他の奴も知つてゐると思ひ。それがどうかしたのか?」

「じゃあ、お前とあの舞つて女しか知らないと」JNHTでねーのか

？」

何言つてるんだ？舞は俺のことなんか覚えてないんだから、そんなところにいるわけないだろ。

「今はそんなの関係ないだろ。」

「いや、さつきも言つたら？代価として特定の記憶だけ消すつてのに慣れてねーつて。」

「それがどうかしたのか？」

「だからよー、ひょっとしたら消し損ねた記憶があるかもしけれねーんだ。まあ、お前のことは覚えちゃいねーんだろうが、お前とあの女は幼馴染つてやつなんだろう？だったら、その場所だけが記憶に残つてゐつてこともあるんじゃねーかなーつてさ。」

「なるほど……。」

俺の記憶がないから全く考えてなかつたけど、そういうこともあるかもしえない。

俺と舞しか知らない場所、か…。

俺達が初めて会つた場所？

それはないか。そんなもの覚えちゃいないし、大方どつちかの家だろ。

「じゃあどこだ……？」

記憶に強く残るような出来事があつて、俺達しか知らない……！？

まさか……！

「あそこか！？」

「お、おい！？ 猛、どこかわかったのか！？」

突然走り出した俺の後ろを走りながら、ヴィンカが叫んでいる。

「わからない。でも、あそこへらいしか思いつかない！」

記憶に強く残るような出来事があつて、俺と舞しか知らない場所。

その一つの条件に当てはまるような場所なんて、俺には一ヶ所しか思いつかない。

三年前、中学一年の冬に、舞を始めて連れていったあの場所だけだ。

思い出の場所

あの日のことは今でもよく覚えている。

十数年ぶりの大寒波がどうとかで、俺の短い人生の中で一番寒い冬だった。

朝から雪が降り続いている、学校から帰った俺は早めに風呂に入つて冷えた体を温めることにした。

風呂から上がり風呂上りの牛乳を飲もうと冷蔵庫を開けるといつも入っているはずの牛乳がなかつた。

仕方なくコンビニに買ひに行こうかと、コートを羽織つて外に出た俺は、何となくいつも行く近所のコンビニではなく、少し離れたところにある別のコンビニへ行くことにした。

その途中、舞が走つていくのを見つめた。

一緒に帰つたはずの舞が、何故、こんなところに居るのか不思議に思つたが、舞の様子がおかしいことに気付き、すぐにあとを追つた。

俺が舞の腕をつかんだ時、舞は泣いていた。

俺は焦つた。舞が泣くところなんて、小学校の低学年以来見ていないかつたから。

舞は、腕をつかんだのが俺だとわかると、俺の胸に顔を押し付けてそれまで以上に泣き出してしまった。

舞が泣いている理由は気になつたが、泣き止ませるのが先決だと考えた俺は、舞の頭を撫でながら泣き止むのを待つこととした。

その時携帯が鳴った。相手は母さん。

母さんから、舞が親と喧嘩して家を飛び出したと聞いた俺は、今舞といふことを告げて電話を切つた。

結局舞が泣きやんだのは、それから約十分後のことで、俺はその間、周囲からの痛い視線に耐え続けなければならなかつた。

泣きやんだ舞を連れて近くの公園に行き、ベンチに座りさせて話を聞く。

そこでよみがへ喧嘩の理由を知ることができた。

舞の話を要約するとこうなる。

来年の冬、俺達は高校受験をすることになる。

舞は成績が良く、このあたりで最もレベルの高い進学校も十分狙えるらしい。

舞の両親もそこへ進学する」とを望んでいた。

しかし、舞はそれを拒否した。

それがきっかけとなり、大喧嘩。

そして、舞は家を飛び出した。

「なるほどな。で? 舞はどうに行きたいんだ?」

「え…?」

「え、じゃないだろ。舞がそんなに意地になるくらいだ、他に行きたい所があるんだろう?」

「それは…。」

「それは?」

舞の口から出たのは家の近くにある別の高校の名前。俺が行くつもりの高校で、レベルは中の上。部活が強いわけでもない、どこでもあるような「普通の高校だ。舞がこだわる理由が分からぬ。」

「なんでそこがいいんだ? 俺が言つのもなんだが、レベルを下げてまで行くよつなどこりうじやないだろ?」

「猛が……か?」

「ん？俺がどうかしたか？」

「猛が行くからーー！」

「へ？？」

「じつこひ」とへ。

「う、それは……そ、そりよ、猛が言つたさじやない！」

「俺なんか言つたつけ？」

「守つてくれるつひ、言つたじやない……。」

耳を疑つた。七年も前の、それも俺が一方的に宣言しただけの約束とも言えないものを、舞が覚えていとは思つていなかつたから。

そして氣づいた。今回の三沢家の喧嘩の原因が俺だったといつて
了。

「理由は本当にそれだけか？」

「…やうよ。じつせんくだらない理由よ。」

そう言つて俯いてしまつた。

「別にくだらないなんて言つてないだろ？それどころか、嬉しかつたくらいだ。舞があれを覚えてたことが。…それに、理由がそれだ

けならない方法も思いついたしな。」

「いい方法?」

「あの約束を守るために、俺と舞が同じ高校に行つた方がいいんだろ? だったらそうすればいい。」

「そんなことわかってるわよ。だから私が猛と同じ高校に行けばいい。」

「

「だからひりひりじゃない。逆だ、逆。」

「逆?」

「そう。舞が俺と同じ高校に行くんじゃないで、俺が舞と同じ高校に行けばいい。ほり、簡単じゃないか。」

「…猛。自分で何言つてるかわかってる? あと一年しかないのよ? そんなこと…。」

「出来るわけないってか?」

舞は微かに頷いた。まあ、そういうの普通はそう思つ。

「でも、やつてみなきゃわからないだろ? それに、俺が約束破つたこと、あつたか?」

俺が立ち上がりつてそのままつと、考へ込む舞。そんなに考へ込まれると、ちよつと自信がなくなつてくれる。

しばりくして、首を横に振った。

「だろ？ できれば考え込んでほしくなかつたけど。」

そつ言つと舞は俯いて、小さく「うめん。」と言つた。

「まあ、いいけど。」

そこでここことを思いついた。確かにこの近くだつたはずだ。

「舞、ちよつとつこてきて。」

舞がベンチから立ち上がるのを確認して公園の出口へ向かつた。

公園を出て歩くこと十数分。俺達は今、街外れの高台に向かつ道を歩いている。

母さんには少し帰りが遅くなると連絡を入れたから大丈夫だらう。
…多分。

高台の公園の少し手前で脇道に入る。

「ねえ、どこに行くのよ。」

もう何度田かになる舞からの質問に「いいから。」と答えながら歩き続ける。

しばりく歩くと開けた場所に出た。

「ここが、父さんに終えてもうつた、父さんと母さんの思い出の場所。

「すいこ…。」

「だひ?」

「ここからは俺達の住む街が一望できる。」

近くに公園があるため人はあまり来ないが、眺めは公園よりも数段いい。

「ここはも、父さんと母さんの思い出の場所らしい。」

街の明かりに田を奪われていた舞は、不思議そうな顔をして俺を見た。

まあ、これだけじゃわからないよな。

「で、父さんがこの場所を教えてくれた時、一つ条件を付けたんだ。」

「条件?」

「『父さんと母さんはここでいろんな約束をして、それを全部守ってきた。だから、ここでした約束は必ず果たされるんだ。お前に何があつても果たしたい約束ができた時はここを使え。ただし、その約束はあつても守り抜け。』ってな。まあ、験抜ぎだな。」

舞は、俺が何を言いたいのかまだ分からぬらしく、ここにつ結構鈍

いな。

「舞、約束する。一年後、俺はお前と同じ高校を受けて、必ず合格してみせる。」

俺がそう言つても、舞からは何の反応もない。

声をかけようと口を開きかけたところで、初めて舞に変化が現れた。

目が潤みはじめ、次第に涙が溜まつていく。

その涙が溢れる直前、舞は俺に抱きついてきた。

「お、おーー！」

「約束……だからね……。破つたら許せないからー！」

そう言つて涙を浮かべながら笑う舞の笑顔は、今まで見た中でいちばん綺麗に見えて、「あ、ああ。」と返事だか呻き声だかわからないうつむき眼の声しか出せなかつた。

その後、沢山の参考書を買い込んで片づけ端から解きまくつたり、先生に教えを乞うなど、思いつく限りのことをやつた結果、何とか舞との約束を守ることができた。

あれから三年。

舞をあの場所へ連れて行ったことは誰も知らないはずだ。

だから、まだ見つかっていない以上、あの場所に居る可能性が高い。

そして彼女は、そこにいた。

舞をえいれば？

彼女、舞は、あの日と同じく、腰元が俺たちの街を眺めていた。

あの日と違つのは、いまが夕暮れ時だとこいつ」とへり。

けれど、夕日に照らされた舞の姿は酷く幻想的で、あの日、街の明かりに日を奪われていた舞とはかけ離れていて……。

相川猛は一度と、三沢舞の隣に立つことはできないのだと突きつけられた気がした。

できることなら、今すぐこの場所から逃げ出したかった。

夕日に日を締める舞に背を向けて、他の誰かに舞を任せ、すべてを放棄してしまったかった。

それでも、逃げるわけにはいかない。

舞にこの場所を教えたのは俺だ。だから、ここで舞を連れ戻すことが、俺に残された最後の責任なのだろう。

ここまで走ってきたことで荒くなってしまった呼吸を整え、すべての感情を押し殺して、俺は彼女に声をかけた。

「おー、あんた。」

俺の声に振り向いた彼女に問いかける。

「「」なんとこりで何してるんだ？」

しばらく黙りこんだ後、彼女は躊躇いがちに口を開いた。

「…ねえ、キミは…よくここに来るの？」

「質問に質問で返すなよ。別にいいけど。ここには今日はじめてきた。

た。」

「やつ…。」

「で、あんたは何してたんだ？」

最初と同じ質問を投げかけると、彼女は街の景色を見渡しながら言った。

「別に何も。私も今日はじめてきたはずなんだけど、なんだか懐かしい気がしてさ。ここで何か大切なことがあった気がするんだけど、思い出せないんだよね。」

決意が搖り動くのを必死で押さえながら適当に相槌を打つ。

「ねえ、キミ、何か知らない？」

「俺が知るわけないだろ。今日ははじめてあって、名前も知らないんだぞ？」

「やつ…だよね。変なこと聞こいで」めんね。」

そつとさり黙りこんでしまった。

「イツを連れ戻さなきゃならぬの」元のままじや埒が明かない。

「なあ…あんた、名前なんて言つんだ？」

「え…？」

「だから、あんたの名前だよ。名前聞けばなんかわかるかもしけないし。」

「あ…うん、私の名前は舞。三沢舞。」

よし、もう一息だな。

「三沢…舞？ああ、そういうえば、ここに来る途中であんたのこと探してる連中見たけど、あれはいいのか？」

「あー、そうだった！」

完全に忘れてたみたいだな。ここいらしい。

「いめん…私行かなきや。」

「待てよ、一緒に歩いてやる。あんたを探してる連中のなかに俺の知り合いがいたんだ。ここから帰る途中で何かあつたら、俺がヤバい。」

「……。」

また考え込んでしまった。いつたいどうしたんだ？

「…ねえ、ほんとに初対面？なんか、キミみたいな人を知ってる気がするんだけど…。」

やば、まづったか…？

「気のせいじゃねえの？…ほら、行くぞ。」

それだけ言って歩き出す。

これ以上墓穴を掘るわけにはいかない。

それに、これ以上こいつと会話をするのはさすがにつらい。せつと終わらせてしまおう。

気付かれないように母さんに連絡を入れ、ついてきているか確認もせずに先へ進む。

一刻も早く、この苦しみから解放されるために。

不自然にならないように道を聞き出し、三沢の家に向かう。

途中何度も名前を聞かれたが、その度にはぐらかした。

目的地に着くと、そこには四人の人物がいた。俺の両親と、三沢の

両親だ。

「じつめでくれば、俺の仕事は終わりだ。」

「じゃあな。」

とだけ言い残し、その場を立ち去る。

「待つてー。」

が、思わず立ち止まってしまった。はあ、慣れっこのは恐ろしい。

自分の反応に苦笑していると、予想通りの言葉が聞こえた。

「私、キハリと会つたことあるよな?..」

答えは決まってくる。

「気のせいだ。」

「じゃあ、どうして名前を教えてくれないの?初対面なら何も問題ないじゃなー!..」

「そうだな…。初対面ならよかつたのにな。」

「あんたに名前を教えるつもりはない。」

やつぱり歩き出す。

後ろで何か叫んでいるが、もう立ち止まるわけにはいかない。今度

「それを本当にやよならだ。

下手をすれば、アイツの身に何が起こるか分からぬ。ヴィンカの言つことが正しければ、俺が自分から名乗るのが一番危険だろうから。

そういうえば、ヴィンカの奴はどこに行つたんだ？途中から姿が見えないが。

まあいいか。いなくなつたつてことは、居る必要がなくなつたつてことだらうから。

だつたら名乗つてもいいんじやないかつて？

「冗談じゃない。

確かに俺がアイツから離れたのはヴィンカに言われたからだ。だけど、今日の一件でよくわかつた。

俺のことを何も覚えちゃいないアイツの隣にいることが、どれだけ苦しいのかつてことが。

そこ今まで考えた時、それまで以上の大声が響いた。

「約束破るつもりー？」

耳を疑つた。

ヴィンカは言つていた。

『お前のことは覚えてないだろ？が、場所だけが記憶に残つてゐるかもしれない』と。

確かに、アイツはある場所を覚えていた。

でも、アイツが『約束』なんて覚えていはづがない。

まさか…、記憶が戻つたのか！？

微かな希望とともに振り返る。

しかし、アイツの顔を見た瞬間、希望は碎けて消えた。

アイツは、自分が何を言つているのかわからぬよつたな顔をしていたから。

やつぱりそんな都合のいいことはないか…。

結局、奇跡なんてものは存在しないんだな…。

再び背を向けた時、視線の先にはヴィンカがいた。

驚いたような顔をしていたが、俺と田が合ひつい、初めて会った時の
ような皮肉気な笑みを浮かべた。

いきなり出てきたと思ったら、俺が絶望するのを見て楽しんでやが
つただけかよ。

やつぱりあの野郎は悪魔だ。

あのときみたいに右手が光っていたような氣もあるが、そんなこと
はどうでもいい。

わへ、俺には関係ないことだ。

やつぱりあの野郎やつやがつたのか。
やつぱりあの野郎やつやがつたのか。

まあ、このまま苦しみを抱えて生きるよりも、死んだ方がましか。

そんなことをほんやりと考えながら意識が途切れのを待つたが、
一向にその時はやつてこない。

不思議に思つてみると、ある事に気づいた。

後ろから誰かが抱きついている。しかも震えている？

「『』……なれ。……め……れこ。『』ぬ……なれ。『』めんなれこ。『』
めんなれこ。」

聞き間違えようがない。間違いなくアイツの、舞の声だ。でもどうして？

「『めんなさい』。『めんなさい』謝るから、何でもするから。だから、私の前から消えないで…。」

「ちょ、落ち着けよ。お前、どうしたんだよ？」

「思い出したの、全部思い出したの…。」

「なつ…?ほ、本当…なのかな？」

「うん…だから、だからあ…。」

でも、なんで？舞の記憶が突然戻るなんて。

つー?まさか!?

視線を正面に戻すと、さつきと同じ場所にヴィンカが立っていた。

今まで見たことのなかつた穏やかな笑みを浮かべて。

あ、旦、逸らしやがった。

以外とお人好しだったんだ。

まあ、せつかくの好意だ、ありがたく貰つとくかな。

「舞、約束する。」の先何があつても、俺がお前を守つてみせる。」

今なり言へる。

よつやく氣付いた本当の氣持ち。

大切な人に忘れ去られるつてことは、その人が死んでしまうのと同じくいつらくて、苦しくて、悲しいものなんだ。

あの時は、アイツが生きてればそれだけでいいと本気で思つてた。
そんなのは撤回してやる。

「じゃあ、もう一度だな。」

俺がそつまつと、舞はすごい勢いで頷いた。

「舞、そんなに心配しなくても、どこにも行つたりしないさ。でも、
お前に忘れられたのはかなりつらかったんだからな？頼むから、もう
う忘れないでくれよ？」

舞は叱られることに怯える子供のように俺を見ている。

後ろから抱きついている舞をさつげなく引きはがして向かい合ひ。

俺は舞が好きだ。

「猛。それってプロポーズ？」

.....。

「「なつー?」」

ハモッた。

「あらあら、相性ピッタリ」

舞は耳まで真っ赤になってしまった。

たぶん俺も似たようなもんだらうけど。

「か、母さん！」

母さんを睨みつけると、親連中四人+一がニヤニヤしていた。

ヴィンカ、お前もか！？

その後、散々からかわれたのは言つまでもない。

ああー！せつかく格好良く決めようと思つたのに…！

君をえいれば？（後書き）

次回の投稿で完結となります。

次回作以降の参考にしたいと思いますので、感想等頂ければ有り難いです。

H&Rローグ～君といとむ～（前書き）

何とか完結せしむことができました！

今回は前回に続き、若干ロマンティック風味になつておつます。

Hペローグ～君とともに～

思い出したくもない、俺の恥ずかしい宣言の後、俺と舞は付き合つことになった。

あとで聞いた話だが、あの時舞の記憶が戻ったのは、ヴィンカの人好しだけが理由だったわけではないらしい。

ヴィンカは、舞の記憶を消す時、一つの誓いを立てていたそうだ。

その誓いというのが、

『もしも舞が、自分の力だけで一部でも記憶を取り戻したときは、すべての記憶を返還する。』

ところのものだつたらしい。

そして、あの場所の記憶も故意に残したのだといつ。

というのも、かつてある死神に負け、見逃してもうう代わりに義務付けられたそうだ。

結局、自業自得じゃないか。

それでも、記憶を取り戻したのは舞だけだつたらしいが。

つまり、悪魔であつても俺達の邪魔はできなかつたといつわけだ。

俺たちの愛の力をなめんなよ！？

すいませんー調子のつてました！

だからそんな冷たい目で見ないでえええええええー！

わて、冗談はこのくらいにして、近況報告と行きませか。

舞が事故に遭つてから約五年が経つた。

プロポーズじみた事を言つてしまつた手前、中途半端なことはできず、必死に努力した結果、それなりに有名な大学に入ることができた。

そして、内定をもらい、卒業を目前に控えた冬の日。

俺は一世一代の大勝負に挑むことにした。

なにかつて？

プロポーズに決まつてるじゃないか！

確かに似たようなことはしましたけどね、こうこうこうとはさつきつしないと、と思うわけですよ。

といつわけで、俺は今あの場所にいる。

やつぱ新しく始めるにほひだよな。

「おーい、タケル。そろそろ時間だぜ。」

ああ、そつをう、ヴィンカの奴は相変わらず俺に憑いている。

どつやら俺と舞はこいつに気に入られてしまつたらし。

あのこりは知らなかつたが、こいつは人の目に見えなくなることができるらしく、契約した俺と、記憶のやり取りをした舞以外には見えなくなつてゐる。

「おーい、聞いてんのかー。」

「ああ、聞いてるよ。」

さて、そろそろ行きますか。

「ヴィンカ、舞を連れてきてくれ。」

「オッケー。」

舞はヴィンカに任せとけば安心だし、あとは待つだけだな。

街の明かりを眺めながらしばらく待つてると、ヴィンカと舞がやつてきた。

俺の隣に舞が立ち、その少し後ろにヴィンカが控える。

この五年間変わらなかつた俺達三人の関係。

それに今、わずかな変化を感じる。

あー、緊張してきた…。

「舞、あのさ、その…。」

ちらりと舞を見ると、わずかに首を傾げて、いつも通りの笑顔で俺を見ている。

ヴィンカは必死に笑いをこらえていたが手に取るよう
に分かる。

……なんだ、緊張してんの俺だけかよ。

あーーーもひこい！

どひせ格好良くなんてできないんだ。

だつたらいつもどおりでいいじゃないか！

「舞、約束する。これから先何があつても、俺がお前を守つてみせ
る。だから、これからもよろしく。結婚しよう。」

…………。

…ん?なんだ、この空気は?俺なんかまづった?

「猛、違ひつよ。」

へ…?

「猛が守るのは私だけじゃないよ。この子も守つてよね?」

舞はそつぱつて、いつくしむよに自分のおなかを撫でた。

「え…、それって、もしかして…。」

「三か月、だつて。」

まじかよ…?

すげー、うれしい!

「やつかーなら、お前たち、だなー。」

「おーい、俺も忘れんなよー!」

「「ワインカは黙つてろ(ハ)。」

「うわー、ひつでー!」

こんなやり取りをしながらも、三人とも笑っている。

こんな毎日が続いてくれればそれでいい。

ヴィンカと、

これから生まれてくる子供と、

そして舞、

君とともに。

Hプローグ～君ととも～（後編）

処女作でしたが、何とか完結させることができました。
楽しんでいただけたなら幸いです。

ありきたりなうえに、文章、内容含めておかしなところが多く多々あつたと思います。

ご指摘等ありましたら感想を頂けるとありがたいです。
今後とも我が拙作をよろしくお願い致します。
それでは、またお会いする日まで…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1384d/>

君さえいれば

2010年12月10日02時32分発行